

山崎郷土叢

No. 79

4. 4. 15

兵庫県宍粟郡
山崎町教育委員会内
山崎郷土研究会
電話 62-2000

近世初頭の山崎藩(三十七)

島田清

二、池田輝澄時代(三十六)

○輝澄と菅友伯

寛永十六年の秋、備前岡山藩主池田光政が、家士牧野能登守を使者として三ヶ条の申入れをしたことは前稿に述べたとおりで、そのうち、最も重要と考えられる第一条の

菅友伯に暇をやるか、光政の手もとに預かるか、の、どちらかを行うよう。

の、「預かる」ことが、どんな意味をもつものかを、事例を挙げて、特に詳しく述べておいた。しかし、結局のところ、輝澄は、これを拒絶した。この申入れに対する輝澄の回答書が遺っていないから、明確に拒絶したか、どうかは明らかでないが、回答書(拒絶の)

目次

①	近世初頭の山崎藩(三十七)……………	島田清……………	1
②	御米大豆門着覚帳……………	久保寅夫……………	4
③	福原謙七翁の碑……………	森本一二……………	11
④	金谷一号墳出土の唐式鏡……………	片山昭悟……………	15
⑤	明治維新の話……………	堀口春夫……………	18
⑥	津和野・萩の旅行記……………	志水美好……………	23
⑦	宍粟郡の指定文化財目録……………	……………	26
⑧	備前焼大甕を歴史郷土館に展示……………	……………	36
⑨	事務局だより……………	……………	37

を出す、出さないにかかわらず、この忠言を無視したことは、その後の行動に示されている。

では、なぜ、輝澄は、光政の忠言を受け入れなかったのか？一言でいえば、輝澄に、それだけの器量きりょうがなかった、ということに尽きる。暗愚あんぐという評価は、少しひどいことばかも知れない。輝澄の少年時代、青年時代の活動を見れば、少くとも、並なみの大名といってよい。いや、もう少し上位に据えてもいいと思う。寛永三年(一六二六)に秀忠・家光が上洛し、後水尾天皇の二条城行

幸を仰いだときに、乗馬の技を披露したことや（このとき二十三歳）、同九年、兄の岡山藩主忠雄が急逝し、嫡子光仲が幼少であったため、幕府より、忠雄の跡を嗣ぐよう命ぜられたときに、辞退して光仲を相続させるようお願いし、それを実現させたこと。さらに、同年、光政と領地を交換して因伯兩國の国主となり、鳥取城に移った光仲の家中が動揺なくおさまっているか、どうかの査察と指導を命ぜられ、鳥取城下に赴いて家老の荒尾志摩守・同但馬守と面談し、その実を挙げさせるようにしたことなど、それを思わせる材料である。（このときは三十歳）。

ところが、この年の九月、將軍家光の実弟で、駿府城主であった忠長（駿河大納言）が除封され、輝澄が十八萬石の大名としてその跡地に封ぜられる、という内意を伝えられて、急遽、江戸へ出府する途中に発病し、江戸へ着いても登城できず、一子虎之助を名代として登城させたところから、心身に一つの異常が起こったのではないかと思われる。將軍家光と輝澄とは従兄弟といふ血縁関係にあったけれども、そうした形式的なことからだけではなく、一個の人間として、家光は、輝澄を好ましい人物と思っていたふしがある。このため、輝澄に、

十年は待つから、氣長に養生せよ。

との温情を伝えたのであった。

この後、輝澄の病状がどのようになったのか、書き記した書類はのこっていない。しかし、徐々に回復したらしいことは、その後の行動で察せられる。すなわち、寛永九年、輝澄の名代として

登城し、家光に謁した一子虎之助が夭折すると、輝澄が代って、藩主としてのつとめを行っているのに徴して明らかである。ただし、参勤交代はしていない。一年在府、一年在国という参勤交代制が定着する時代に、この年（寛永九年）から除封される寛永十七年までの九年間、一度も参勤交代していない、というのは、特に、それを免除されたためであろう。免除の理由は、いうまでもなく、健康問題であったが、この健康問題が、内臓とか、外傷とか、いったものでなく、**「脳」**の活動に関連するところに、大きな問題が生まれてくる。簡単に、かつ、やさしいことばでいうならば、

輝澄は、お脳のはたらきが弱くなられた。

た。

ということである。日常の会話に困ることはなく、將軍家よりの命令を理解することも可能である。

登城しての礼儀作法も一応ととのい、必要なことを申述べることもできる。

これら、藩主としてのつとめは、まずまず、果せる。ただし、このためには、側近に何くれと諮問



- 山崎店 栄楽郡山崎町今宿129 ■ 営業時間 9:00~19:00
☎0790-62-2434(代)
- 竜野店 竜野市竜野町高字田井屋1005-64 ■ 営業時間 9:30~19:00
☎0791-63-3226(代)
- 上郡店 赤松郡上郡町山野里字南行及2399 ■ 営業時間 9:30~19:00
☎07915-2-0703(代)
- 太子店 揖保郡太子町老原市川原39 ■ 営業時間 9:30~19:00
☎0792-76-0018(代)
- 佐用店 佐用郡佐用町円座寺86 ■ 営業時間 9:30~19:00
☎0790-82-2001(代)

定休日 / 毎週火曜日

し、また、厚い補佐を得なければならなかったことは、充分、想像される。そして、藩主として最も重要な思慮分別に欠け、複雑な問題や、内面へ踏みこんでの考察、判断などができなかったことも。寛永九年に発病して以後の輝澄は、江戸藩邸において、こうした状態の生活を続けていたものと思われる。

このことは、菅友伯や、それと同腹の江戸家老小川四郎右衛門にとつて、このうえなく好ましいことであった。なぜならば、自分たちの思うように、藩主輝澄を誘導することができるところである。「白を黒に言いかえる」ことも、恐らくやったであろう。佞臣といわれる友伯にしてみれば、輝澄を、どのようにでも操れる人^{あやつ}と思っていたのではあるまいか。輝澄の側室に縁故があるところから、元和元年以来、ずっと山崎藩江戸邸につとめ、日夜、接触を続けてきた友伯が、輝澄にとつて、最も親しく、最も頼りになる存在と思われたのは、自然の成り行きである。しかし、その根性のよくないことが、遂に、破局への道を歩んだのは、まことに不幸であったといわねばならぬ。

寛永九年に発病する以前の輝澄は、江戸に、山崎に、或いは鳥取に使用するなど、行動に広さと巾があり、接触する人物も多かった関係から、人間としての成長も、それなりにあったと思われる。しかし、発病後は藩邸に閉じこもり、回復しても元通りの活動をするまでに至らず、必要最少限度のつとめを果すだけの身となった。したがって、家臣たちの進言、あるいは申出も、菅友伯や小川四郎右衛門ら寵臣の手によって処理される結果となって行った

のである。

一方、国許の家老伊木伊織は、元和元年の立藩直後に採用された身であるが、輝澄の父輝政の筆頭家老として功績のあった伊木清左衛門忠次を父にもち、輝澄より二十一歳の年長であった。伊織が家老となった元和四年、藩主輝澄は十五歳であったから、三十六歳になっていた伊織は、親のような感じで、心やすく話しあう、という状態ではなかったろうと思われる。国許において、藩政をとり進めさせるには都合がよかつたかも知れない。しかし、自ら藩政をみようとする年齢になると、何となく、煙たい存在に思われてきたこともあつたにちがいない。こうしたことが、江戸藩邸にも家老を置こうとする意図としてあらわれたのである。うし、それを、菅友伯にうちあけ、友伯の推挙で小川四郎右衛門が召し抱えられたのである。この経緯からみて、伊木・小川両者の間が、本来、「疎遠」であつたのは己むを得ない。

寛永九年の発病以来、藩邸から殆んど出ず、山崎にももちろん帰らなかつた輝澄は、国もとの伊織から申出ること、小川四郎右衛門や菅友伯を相手にしながら聴いたと思われる。言いかえると、輝澄が、小川・伊木の両家老を、別々の立場にあるものとして切り離し、それぞれの申し分を自主的に判断する能力をもっていたら、そして、その判断によって、一段高所に立つての処理ができたならば、問題はない。しかしながら、このときの輝澄は、そうした藩主の立場を自覚することなく、ただ、周辺の日常生活が流れて行く中で聴き、したがって小川や菅の意見をききながら

伊木の申出を理解する、という状態であったのであろう。これでは、伊木伊織の申出が、率直に理解されることはない。伊織にひきいられる国許の藩士が、小川・菅に擁立された輝澄と離れてゆくのも己むを得ないことであった。この情勢が、友伯一派の専断を生み、それがエスカレートして、藩政を紊乱させることとなったのである。

元来、山崎藩は、立藩のとき、本家の池田家より分けて付けられた藩士を主体として家臣団を構成していた。しかし、新しく召抱えるもの——新参もの——もできたし、佐用郡二万五千石を加賜された寛永八年以後は、殊に、その数がふえた。

古参組と新参組——藩内に、こうした派閥が顕著になつて行つたのも己むを得ぬ現象であつたが、それをうまく調整してゆくのが首脳部の役目である。しかし、この両者は、しだいに反目をつのらせ、藩政主導権争いへ、と大きく発展した。藩主はこれを押さえ、適切に処置せねばならぬ立場にあつ

株式会社
安井書店

90山崎町山崎郡粟
TEL山崎(62)0700(代)

たにもかかわらず、「お脳が弱くなった」のではしかたがない。善となく、悪となく、取り巻きたちの吹きこむことばに翻弄ほんろうされる輝澄に、心ある人は危険を感じたにちがいない。池田光政の忠言は、これを代表するものであった。輝澄と光政とは、叔父・甥の間柄である。輝政の嫡孫光政は、池田家一統の本家筋に当るが、輝澄の方が六歳年長である。輝澄の心に、光政が何をいうかという心情が動いたとしても、発病後の経過をみてくれば、己むを得ぬことであつたかも知れない。輝澄は、こうしたことから、光政の申し出に従わなかつたのであるが、これが、身を滅ぼす原因になるうとは、この時点における輝澄の思い及ばぬところであつた。

御米大豆門着覚帳

久保寅夫

幕府は自らの財政強化のため、大阪湾沿岸の酒造地帯を取り上げて、その代りに西播(赤穂・佐用・宍粟)で替地を与えることにした。

宍粟郡内での尼ヶ崎藩領となつたのは、次の村である。

山崎町内 上町・中町(宇野)・清野・野々上

一宮町内 深河谷・伊和の一部・安黒

明富町内 東塩野・植木野・三坂・狭戸

昭和九年には植木野組と呼ばれた、植木野庄屋塚本八郎左エ門が大庄屋を勤めた。安永六年には、伊和村土居七郎右衛門が大庄

屋であったと記録されている。

尼ヶ崎藩の西播取締りの役所は、上郡にあった。

安政元年上町村庄屋藤兵衛が、出石の蔵元三木伴助のもとで、尼ヶ崎藩への年貢米、大豆を網干蔵元安田弥兵衛に納めるまでの記録である。宍粟郡内から年貢を納めたのは、上町・中町・安黒・伊和・清野・野々上・三坂・塩野・狭戸・植木の村々であった。上町・中町は、いま宇野と呼ばれている。

安政六年出石川岸詰役
御米大豆門着覚帳
未十一月吉日
上町村庄屋
藤兵衛

十一月十三日
御米 五斗 中町村入作下町村

弥三五郎

十一月十三日

御米 七石 清野村

三合四夕かん 米屋与右門

十一月十三日

八石 式合かん 安黒村

繁左衛門

十一月十三日

御米 拾石 安黒村

内三石 伊和村

十一月十三日

御米 拾貳石 上町村

十一月十三日

御米 四石 上町村と

下町村銀蔵

十一月十三日

御米 四石 中町村

十一月十三日

御米 七石 野々上村

十三日

五拾二石五斗

十一月十四日

御米 貳石 清野村

米屋伝兵衛

十一月十四日

御米 拾壹石 安黒村

十一月十四日

御米 八石 上町村

十一月十四日

御米 五斗 上町村

下牧谷源蔵

十一月十四日

御米 貳石 伊和村

十一月十四日

御米 拾石 野々上村

三合四夕かん 米屋久五郎

三拾三石五斗

二〇合 八升六合

十一月十五日

御米 貳拾貳石 三坂村

内老石 相称

弥二郎

武右エ門

十一月十五日

御米 拾九石 塩野村

十一月十五日

御米 拾参石五斗 狭戸村

十一月十五日

御米 拾八石入作共 植木野村

内三名 左称[△] 清右エ門^{△△} 吉太郎^{△△} あり^{△△}

御米 拾五石納 植木野村

御米 拾八石五斗 塩野村

内老石五斗^ふ

十一月十五日

御米 拾七石 塩野村

十一月十五日

御米 拾石五斗 狭戸村

十一月十五日

御米 廿石

内式石相称[△]

御米 拾八石 三坂村

御米 廿三石五斗

内五斗相称[△] 吉郎兵衛

十一月十五日

御米 貳拾三石 植木野村

百二十七石 十五日納

十一月十六日

御米 四石五斗 清野村

十一月十六日

御米 六石 伊和村

老合四夕かん升

十一月十六日

御米 拾石 上町村

御米 貳石 中町村

十一月十六日

御米 廿九石 野々上村

内老石五斗 伊和村向

五十二石五斗

十一月十六日

御米 壹石 安黒村

十一月十七日

御米 拾五石 塩野村


十一月十七日

御米 六拾七石五斗 植木野村

最新型カラー現像機導入 カラープリント・スピード仕上げ

兵庫県市町村職員共済組合指定店
 良い品を・安く・安心して買える店

Specialty Camera Shop
コーエカメラ
 宍粟郡山崎町東鹿沢26-3 ☎62-2089



十一月十七日

御米 五石五斗 三坂村

外二三石おなじ米納

十一月十七日

御米 廿壹石 狭戸村

十一月十七日

御米 壹石 安黒村

十一月十七日

御米 拾壹石 植木野村

十一月十七日 御米 拾壹石 狭戸村
 十一月十七日 御米 拾八石 塩野村
 十一月十七日 御米 拾五石 安黒村
 〆百六十五石 五右衛門のり納
 十一月十八日 御米 五斗 下町村 要蔵
 十一月十八日 御米 貳石五斗 中町村
 十一月十八日 御米 拾貳石五斗 まはし奎兵衛
 十一月十八日 御米 三石 安黒村
 十一月十八日 御米 四石 中町村
 十一月十八日 御米 四石五斗 安黒村

十一月十八日 御米 三石五斗 伊和村
 十一月十八日 御米 九石 安黒村
 十一月十八日 御米 貳石 伊和村
 十一月十八日 御米 貳石 安黒村
 十一月十八日 御米 三石 伊和村
 十一月十八日 御米 拾石 上町村
 十一月十八日 御米 四拾貳石 野々上村
 〆九拾八石五斗
 十一月十九日 御米 拾四石 塩野村
 十一月十九日 御米 拾五石五斗 植木野村
 十一月十九日 御米 五拾壹石五斗 狭戸村

十一月十九日 御米 九石 塩野村
 十一月十九日 御米 拾壹石五斗 植木野村
 十一月十九日 御米 拾六石 狭戸村
 〆百拾七石五斗
 十一月廿日 御米 貳石 清野村
 十一月廿日 御米 五石 露蔵
 十一月廿日 御米 拾七石五斗 吉太夫まわし
 十一月廿日 御米 四石 上町村
 十一月廿日 御米 五石五斗 狭戸村

十一月廿日

御米 拾石

野々上村

四拾四石

十一月廿日

大豆 六石五斗

野々上村

十一月廿日

御米 四石五斗

伊和村

十一月十八日

御米 八石五斗

伊和村

十一月廿一日

御米 五斗

清野村

十一月廿一日

御米 壹石

伊和村

十一月廿一日

御米 貳石

安黒村

安政六年 出石河岸詰役

未御年貢米大豆割印帳

十一月吉日

上町村庄屋

藤兵衛

十一月十三日

一御米 五斗

中町村

入作下町

弥三五郎

十一月十三日

一御米 七石

清野村

十一月十三日

一御米 拾五石

安黒村

十一月十三日

一御米 三石

伊和村

十一月十三日

一御米 拾貳石

上町村

十一月十三日

一御米 四石

上町分入作銀蔵

十一月十三日

一御米 四石

中町村

一御米 七石

野々上村

十一月十四日

一御米 貳石

清野村

十一月十四日

一御米 貳石

伊和村

十一月十四日

一御米 拾壹石

安黒村

十一月十四日

一御米 八石

上町村

十一月十四日

一御米 五斗

上町村と下牧谷村

十一月十四日

一御米 拾石

野々上村

十一月十五日

一御米 拾九石

塩野村

十一月十五日	一御米 [㊦] 拾八石	植木野村	十一月十六日	一御米 [㊦] 四石五斗	清野村	十一月十七日	一御米 [㊦] 六拾七石五斗	植木野村
	内三石左称 [△]							
十一月十五日	一御米 [㊦] 拾五石	植木野村	十一月十六日	一御米 [㊦] 六石	伊和村	十一月十七日	一御米 [㊦] 八石	三坂村
	一御米 廿石				安黒村	十一月十七日	一御米 [㊦] 貳拾壹石	狭戸村
	内壹石左称 [△]		十一月十六日	一御米 [㊦] 拾石	上町村納	十一月十七日	一御米 [㊦] 拾壹石	植木野村
十一月十五日	一御米 廿壹石	三坂村	十一月十六日	一御米 [㊦] 貳石	中町村	十一月十七日	一御米 [㊦] 拾壹石	狭戸村
	一御米 [㊦] 拾三石五斗	狭戸村			野々上村	十一月十七日	一御米 [㊦] 拾八石	塩野村
十一月十五日	一御米 [㊦] 拾三石五斗	狭戸村	十一月十六日	一御米 [㊦] 七石五斗	野々上村より	十一月十七日	一御米 [㊦] 拾五石	安黒村
	一御米 [㊦] 拾八石	三坂村			伊和村	十一月十八日	一御米 [㊦] 貳石五斗	中町村
十一月十五日	一御米 貳拾三石	植木野村			治兵衛へ			
	一御米 [㊦] 拾七石	塩野村	十一月十七日	一御米 [㊦] 拾五石	塩野村	十一月十七日	一御米 [㊦] 三石五斗	上町村

内五斗下町入作(与蔵)

十一月十八日

一御米 拾貳石五斗 清野村

十一月十八日

一御米 拾八石五斗 安黒村

十一月十八日

一御米 八石五斗 伊和村

十一月十八日

一御米 四石 中町村

十一月十八日

一御米 拾石 上町村

十一月十九日

一御米 拾四石 塩野村

十一月十九日

一御米 拾五石五斗 植木野村

十一月十九日

一御米 五拾壹石五斗 狭戸村

十一月十九日

一御米 九石 塩野村

十一月十九日

一御米 拾壹石五斗 植木野村

十一月十九日

一御米 拾六石 狭戸村

十一月廿日

一御米 五石 上町村

十一月廿日

一御米 貳石 与位大正寺分

十一月廿日

十一月廿日

一御米 拾七石五斗 清野村

十一月廿日

一御米 四石五斗 伊和村

十一月廿日

一御米 壹石 安黒村

十一月廿日

一御米 四石 上町村

十一月廿日

一御米 五石五斗 狭戸村

十一月廿日

一御米 拾石 野々上村

十一月廿日

一大豆 六石五斗

外二壹斗三升 野々上村

八合五夕

十一月廿一日

一御米 五斗 野々上村

十一月廿一日

一御米 五斗 清野村

十一月廿一日

一御米 壹石 伊和村

十一月廿一日

一御米 貳石 安黒村

十一月廿一日

一御米 式石

野々上村

厄御米 三拾石

敷付

以下次号に続く

(久保家文書)

福原謙七翁の碑

森 本 一 二

山崎町と近在には明治・大正のすばらしい漢文碑・国文碑が数々あります。

その中で明治十九年の栗山君碑(神谷)、明治二十七年の三木君之碑(十二波墓地)、明治三十五年の神徳馨の碑(黒住教会)は、すばらしい漢文碑であります。

その重厚にして高格な撰文は、見る者をして朗々と高唱させずには措きません。

この三碑と、明治三十一年の山崎町開始三百年記念碑(八幡神社)の撰者は福原謙、又は福原謙七と刻されています。

前記三碑に対面して明治の碑に魅せられた私は撰者福原謙七さんに深い感銘と関心を持つようになりました。

昨年五月最上山にこの福原さんの碑があることを聞き、早速尋ねてみました。

町役場から県道を渡り、山に向って北上すると、約百五十米ばかりで、えびす神社に到ります。その境内を抜けて急になった坂道を登ると、二折れ、三折れして最上山の鍾つき堂に達します。

そのすぐ手前、左手山側に堂々たる一大隆碑があります。

五尺台座の上に、巾五尺・高さ八尺の碑石が乗っており、深々と彫った「福原謙七翁碑」の文字がはっきりと読めます。

裏に廻ると美しい字がびっしりと並んでいます。下からでは書き写せないのです、台座に上りました。

台座に立っても上の字は読み取り難い程高くから書かれています。写碑をする時には、まず第一に一行の字数を数えます。そして紙面の升目をその数に合わせます。

そうすると落字の有無が行末毎に確認出来るからです。

この碑は一行二十二字、本文二十五行、三字欠の五四七字の長文から成っています。

一字一字読みを下しながら克明に書き写します。全文を写すのに、中で一

健康づくりの相談が気軽にできる店

ごころ薬局

薬剤師 岸本八重子
岸本弘子

山崎町東和通り・☎(0790) 62-1190

服して一刻を要しました。

書き終ると碑石と対照して読んで行きます。

はじめは頭の中で読んでいますが、美句・麗辞に酔って来て、朗々と高唱するようになってしまいました。

時に帯を持った老翁が、碑上の人影を奇として寄り来り、「何かする」と問うに、「写碑なり」と答うれば、頭を傾けて去りました。

この碑も勿論、句読・反点などありません。写碑原文のまま掲出したのであります。浅学の私訓を付すことで美玉に瑕疵、或いは蛇に足をつけてとかげ蜥蜴にしたくないからです。

しかし紙面の都合もあって、句読・反点をつけましたが、行数・字数は原碑を留めます。これは諸賢に白文に返して正しく読んでほしいと願うからであります。



福原謙七翁碑

正三位勲一等男爵 田健治郎書

翁名謙七、號鷗突。天保十二年八月生於播州山崎。考稱
 橫野儀右衛門兼米商翁。初呼隆藏。中稱廣尾練藏。後復
 祖姓福原。改名謙七。幼聰慧。有氣骨。早失怙恃。不欲讓家
 業。奮然立志。出鄉闕。歷遊于諸方。師事。後藤松蔭。渡邊弗
 指。小島省齋。阪谷朗廬等。諸儒。其間學資缺乏。身纏敝衣。
 口甘糲糠。備嘗燈雪。難苦前後十餘年。專攻儒學。造詣頗
 深矣。明治維新之初。為藩主。本多侯所聘。列士籍。督藩學。
 無幾。廢藩置縣。尋布學制。翁為飾磨縣學區取締。十二年
 行縣制。郡治也。任兵庫縣。攝東郡長。尋轉印南郡長。十七
 年。辭官。歸鄉。興靖獻義塾。教養子弟。傍事著述。曾著皇朝
 靖獻遺言行于世。後慨古。委靡風紀。願隨著教憲。衍義
 等書。以努于之匡救。又致志國富大。唱造杯之要。二十七
 年。日清兩國風雲告急也。草緊急。策以喚國論。尋承品
 川子之知遇。參畫其政策。三十六年。有所感。絕意于政事。
 橋底于大阪。復就著作吟詠。傍以點灸術為業。翁嘗患胃
 病。苦彌久。獨受灸治。病根忽絕。翁深感其奇効。以為治病

保健之捷法莫以如焉。慨然有弘濟之志。專修生理醫學。深究點灸術。遂得官允。廣施其法。遠近相傳。患者翕集于門。受惠甚多。碩儒重野成齋曾受其術。書神灸二大字贈之。可以見其概也。翁性恬淡。寡欲。唯事閑。國家則侃諤辨論。而與時流少所合。退而友古賢。清貧自樂。其志操之高潔。世所稀觀也。大正十三年二月六日病歿。年八十四。葬遺骨于先登之次。翁學四男五女。二男二女。長子安太郎。繼家次子卓次郎。獲灸術門人相謀。將建碑以余與翁有舊。屬余文。余聞之。追懷不禁。因不敢辭。記其梗概。

大正十三年十月 友人 田艇吉謹撰
兵庫縣立龍野中學校教授馮託、淺井潔謹書

敬慕者芳名

小林善太郎 外八十八名 略

發起者

尾崎孝三郎 外二十七名 略

平成三年五月二十九日

山崎町神谷 森本一二 字

私読

翁の名は謙七、鶴突と号す。天保十二年八月播州山崎に生る。考は横野儀右衛門と称し業は米商なり。翁は初め隆藏と呼び、中に横尾練藏と称し、後に祖姓福原に復し、謙七と改名す。幼にして聡慧気骨有り。早く怙恃を失い、家業を襲ぐを欲せず。奮然志を立て、郷関を出でて諸方を歴遊し、後藤松蔭・渡辺弗措・小島省齋・阪谷朗虚等諸儒に師事す。其の間学資欲乏し、身に幣衣を纏い、口に糟糠を甘しと備え、蜚雪の難苦を嘗むこと前後十餘年、儒学を専攻し造詣頗る深し矣。

明治維新の初め藩主本多侯の聘く所と為り士籍に列し藩学を督す。幾ばくも無く廃藩置県、尋いで学制を布く、翁は飾磨県学区取締と為り、十二年府県郡治を創るや兵庫東郡長に任じ、尋いで印南郡長に転ず。

十七年官を辞し郷に帰る。靖獻義塾を興し子弟を教養する傍ら著述を事とす。曾て「皇朝靖獻遺言」を著し世に行う。後に世務の委靡と風紀の頽墮を慨き「教憲衍義」等の書を著し以て之の匡救に努む。又、志を国富に致し、大いに造林の要を唱う。

二十七年、日清兩國の風雲急を告ぐるや「緊急警策」を草し、以て国論を喚ぶ。尋いで、品川子の知遇を承け、其の政策に参画す。

三十六年、感ずる所有り、意を政事に絶ち大阪に僑居す。復た著作と吟詠に耽ける傍ら點灸術を以て業と為す。

翁嘗て胃病を患う。苦しみ彌久しく、隅々灸治を受く。病根忽

ち絶ゆ。翁深く其の奇効を感じ、以て病を治む保健の捷法は以て加ふる莫しと為す。焉。

慨然として弘済の志を有し、生理学を専修し、深く點灸術を究め、遂に官允を得て広く其の法を施す。遠近相伝え、患者は門に蟬集す。受惠甚だ多し。

碩儒重野成齋、曾つて其の術を受く。「神灸」の二大字を書き、之に贈る。以て其の概を見る可きなり。

翁、性恬淡寡欲、唯だ事の家國に關すれば則ち侃諤辨論して時流と所合少し、退いて古賢と清貧を友とし、自ら其の志操の高潔を樂しむ、世の稀觀とする所なり。

大正十三年二月六日病歿。年八十四、遺骨を先塋の次に葬る。

翁、四男五女を挙げ、二男二女夭し、長子安太郎家を繼ぐ、次子卓次郎灸術を襲ぐ。

門人相謀りて將に碑を建てんとし、余と翁旧有るを以て、余に文を囑す。余之を聞き、追懷禁せず、因りて敢て其の梗概を記する辞せず。

難語

鶻突—鶻コツ・鷹・鶻突は号であるが意は（明らかでないさまはつきりしないさま）

估侍—父母 糟糠—かすやぬか・酒のかす・米ぬかを（持ちまわり）

僑居—かり住まい 侃諤—正しいと信ずることを勇敢に言つてのけるさま。

稀觀—めずらしい まれに見る 先塋—先祖の墓

福原謙七翁顕頌碑

「補釈」

尾項に大正十三年、福原謙七翁の顕頌碑を建設した発起人達は、明治の時代福原塾に学んだ塾生であり、福原先生の薫陶を受けた方々が、福原会と言う会を結成して居られた。その人達がその後山崎史談会と改称し、時々寄合つて昔噺に花を咲かせ、先生の遺徳を偲んでいたが、此の会がさらに昭和七年山崎郷土史研究会に発展し、会員も漸次増えて行き、今日の郷土研究会となったのであります。『福原会』が即ち山崎郷土研究会の発祥の根元でもあります。

撰者の友人田艇吉は翁の若き頃、氷上郡柏原藩藩儒 小島省齋の門下で共に学んだ学友である。

「堀口」

金谷一号墳出土の唐式鏡

「瑞雲双鸞八花鏡」

片山昭悟

山崎町金谷字湯船口の金谷一号墳から大正時代に唐式鏡である「瑞雲双鸞八花鏡(すいうんそうらんはっかきよう)」が出土している。

この瑞雲双鸞八花鏡と呼ばれる鏡は、日本でつくられた奈良時代の鏡であり、唐式鏡の中のひとつである。

この鏡は、面径十一センチで、全国出土の瑞雲双鸞八花鏡の中では最小である。

鏡の文様構成は、内区には鈕を挟んで左右に想像上の鳥である鸞を配して、鈕の上部には雲紋がたなびき、下部には蔓草に止まる鳥紋を配し、外区は花紋と雲紋を交互に配置している。

金谷一号墳出土鏡は、保存状態も良好であり、文様の表出ははぶく、内区の鳥紋の羽毛の表現が見られず、鑄造の彫り加えが行われていない。

外縁の幅は、まちまちで外縁の輪郭線だけが、内区と外区の文様に対して左にずれている。また、内区の鈕左上付近にはひび割れによる范傷が認められ、外区の第二花紋と界圈との間に范傷がある。

この鏡は、現在東京国立博物館に所蔵されている。

私は昨年八月に東京国立博物館金工室において大正時代に金谷

奈良時代の鏡 瑞雲双鸞八花鏡



金谷1号墳より出土した鏡 (東京国立博物館蔵)

を離れて初めて特別観覧させていただいた。

金谷一号墳出土鏡については、昭和六年に後藤守一氏が「本邦出土の唐式鏡」『考古学雑誌』第二一巻一二号に播磨国宍粟郡城下村大字金谷字湯船口 花枝双鸞八花鏡 金銀環各一と須恵器を伴出したと紹介され、昭和四十七年に中野政樹氏が『東京国立博物館紀要八号』に香取神宮鏡と同型鏡で、踏み返し量産鏡の末期的状態を示すとされている。平成元年に杉山洋氏が「唐式鏡の生産と流通の考古学」『生産と流通の考古学』に湯船口鏡として日本出土鏡の偏差値平均より霊安寺系列のD段階に入り日本出土鏡中最

小の瑞雲双鸞八花鏡とされている。

瑞雲双鸞八花鏡は、これまでの史料文献、伝世品、発掘調査などにより金谷一号墳出土鏡を始め一六面が全国で出土している。

最近の出土例は、平成元年に平城京より初めて出土している。

奈良国立文化財研究所の平城宮跡発掘調査で長屋王邸宅跡北の二条大路北側溝より出土している。

平城京二条大路出土鏡は、直径十一・五センチあり、金谷出土鏡よりやや大きく、時期的には遡るものと考えられる。金谷出土鏡と平城京二条大路出土鏡は、文様構成も同じであり、とくに内



平城京二条大路北側溝より出土した鏡
(奈良国立文化財研究所蔵)

区の瑞雲紋、第一鳥紋や第二鳥紋、外区の第二雲紋・第二花紋の范傷がほぼ同じであり同型鏡である。これらのことから金谷一号墳出土鏡は平城京出土鏡の踏み返し鏡であるとも考えられる。また、原型鏡は同一であるものと考えられる。

ふたつの鏡は、近畿地方のどこかに鏡を鑄造した工房が存在していたものと推定される。

金谷一号墳は、湯船口の丘陵緩斜面に立地している。

古墳からは、城下平野が一望でき、揖保川が大きく蛇行しているのが見える。一号墳は三基ある古墳のひとつである。現状については盗掘されているため石室内がほとんど破壊され、天井石もなく奥壁石が石室の中央に一個残存し、側壁石が下位にわずかに残存しているのみで古墳の原形を留めていない。古墳は径約一二メートル、高さ約三メートルの円墳で、内部構造は全長約四メートル、幅約一メートルの無袖の横穴式石室であると思われる。古墳の規模および内部構造から古墳時代終末期の七世紀前半から中期頃と考えられる。

鏡は古墳内より出土したとされるが、奈良時代のものであり、時期差があることから再利用された被葬者の副葬品と思われる。

平城京で出土した貴重な唐式鏡が、山崎町金谷の金谷一号墳より出土していることから中央と被葬者とは密接なつながりがあったものと推定される。

被葬者はなぜ唐式鏡の瑞雲双鸞八花鏡を所持できたか、また、どのようなルートでこの鏡が入手できたのであろうか、「謎」である。

参考文献

- ・杉山洋「唐式鏡の生産と流通」『生産と流通の考古学』
- 横山浩一先生退官記念事業会 平成元年
- ・杉山洋「平城京出土の唐式鏡」『奈良時代の鏡』
- 奈良国立文化財研究所第六十六回公開講演会資料 平成二年
- ・小池伸彦「出土遺物」『平城京長屋王邸宅と木簡』
- 奈良国立文化財研究所編 平成三年
- ・後藤守一「本邦出土の唐式鏡」『考古学雑誌』第二一巻一二号
- 昭和六年
- ・中野政樹「奈良時代における出土伝世唐式鏡の基礎資料および同范鏡とその製造技術」『東京国立博物館紀要八号』
- 昭和四十七年

明治維新の話

堀 口 春 夫

慶応四年戊辰の戦いは、徳川十五代將軍慶喜が大政を奉還し、王政復古の恭順に服従したにもかかわらず薩長連合の勢力者が実力によって幕府をたたき潰そうとして天皇をかつぎ出し、將軍を逆賊に仕立てようとする陰謀を察知したので、此の賊名を濯がんと建白書を奉じて君側の奸をのぞかんとし、大阪城より会津桑名の藩兵を先頭に上洛しようとしたのに、これを阻止しようと京都に集結した薩長の軍勢と、伏見奉行所を守る新撰組とが先ず衝突

し戦端を開いたのに始まり、淀城に待機した会津桑名の本隊が進軍を開始し、鳥羽街道を桑名勢、伏見街道を会津勢と京に向って進発した。慶応四年正月三日の事である。

しかし、幕軍の装備は旧式の大砲と外国製とはいえ旧式のゲベール銃、それに刀鎗に重点を置いた会津、新撰組の戦いでは、長州征伐戦で近代戦法を経験し、英国製のアームストロング砲や、元込め式の新式銃を持った京軍とでは戦いの勝負にはならなかった。近づく事すら難しかったのである。特にアームストロング砲の破壊力は驚く程で、石清水八幡山に陣取った会津の大砲隊が撃つ砲弾は敵にとどかなく、かえって勇敢に進み過ぎた味方の先兵を傷つける始末、それにひきかえ薩摩の大砲は着弾も正確に、会津桑名の陣地を破壊し、民家に隠れた幕兵を家ごと吹き飛ばす有様は物凄く、会津の藩兵は勇敢に飛出して敵に肉迫しようとするのに反し、薩長の西国兵は散開して巧みに地物にかくれ銃撃し、姿を見せない巧妙な近代戦法ぶりで



あった。

四日五日となって前戦の敗報は次第に後方にも伝ってくる。幕兵の負傷者はどんどん増えてくるのに、京軍の負傷者は伏見の最初の戦闘で受けた者ぐらいであった。山崎藩の大阪詰め藩兵は幕軍最後備の十三口に居たが、四日の朝淀川尻より伝令が来て、大阪湾に薩摩の軍艦が排廻し、上陸の機を狙っていると言う。摂津の国は旗本の天領地が多く、直参旗本の代官が領地を守備していたが、若し西国兵が淀川口に上陸したなれば、京と大阪で幕軍は狭み撃ちに合う。河口の警備は手薄であるから援兵を寄せせよと言う。後備に居た岸和田藩や丹南藩、山崎藩定番兵は、思案の上、この申入れに少数ながら義理にからんで兵を別けて淀川口へ赴かせた。

山崎藩では岩崎又左エ門の指図で五名の者が別けられ、他藩の者を合せると百人ぐらいの兵隊が加勢に赴く。此の別動隊は最後まで本隊と一緒にいる事は出来なかった。共に国を出た毛利・堀口・庄・の三名は共に離れぬ事を誓い合った。

尼崎藩の藩兵は西宮に上陸した西国兵に一方を囲まれ親藩ながら動きが取れない。間もなく海上で砲声が轟き海戦が始まったらしい。後でわかった事であるが薩摩の軍艦は上陸を狙っていたのではなく、伏見の初戦で傷ついた薩藩の傷兵が舟で下って来た者や、江戸から退れて来た藩士の家族を川口で救出する目的であった。ようやく救い取った薩摩艦船が国元へ引上げ様とする時、兵庫から来た幕府軍艦に察知され、砲撃を受けて艦が傾いたまま国元へ逃げ帰ったと言う。

淀川上流の敗報がしきりに伝わって来る六日の朝になって、直参旗本の神保とか言う大将が騎馬武者姿であらわれ、「も早や淀川口の警備は必要でなくなった、各々方は前戦の敗報を聞いたであろうが……このまま戦わずして引き退っては三河以来の武士の面目が立つまい。川上の幕軍を応援されよ、吾れと思わん者は吾が隊に続け……」と甲冑姿の旗本大番衆の団を率、つれ大音声に督戦する。その他はまとまりのつきにくい各藩の混成旅団ではあるが、言われて見ると武士の意地と言おうか、何時の間にか一団となって堤の上を駆け始めていた。

上流に近づくに従い会津桑名の負傷兵が血み泥になって退がって来る。武者人形の様な旗本の大將は馬上で採配を振って、「退くなー退くなー、三河武士の意地を忘れたかー」と怒鳴っていた。しかし、これ以上土堤を逆行する事は無理なので、旧道に下りて伏見街道を駆け走った。冬とは言え肌が汗ばんでむき苦しい。枚方辺まで来ると民家が盛んに燃えている。荷車を引いて逃げまどう避難民に出合っと思う様に進めない。田甫道に出たり、畑や湿地に踏み込み、隊列はほとんど乱れてしまった。

退脚する兵の口からは、「無念」の言葉と共に、男山に居た藤堂藩が裏切ったと言う。彦根藩も大垣藩も大津へ向って引揚げて行くと言う。淀城も老中まで勤めた親幕派の稲葉家であるが城門を閉ざして、姫路藩や明石藩、篠山藩の援軍を入れないとの噂さ、その理由は京軍に錦の御旗が立った事で、幕軍の戦意が衰え、逆賊の汚名を恐れて退き始めたのであった。藤堂藩などは官軍にね返り

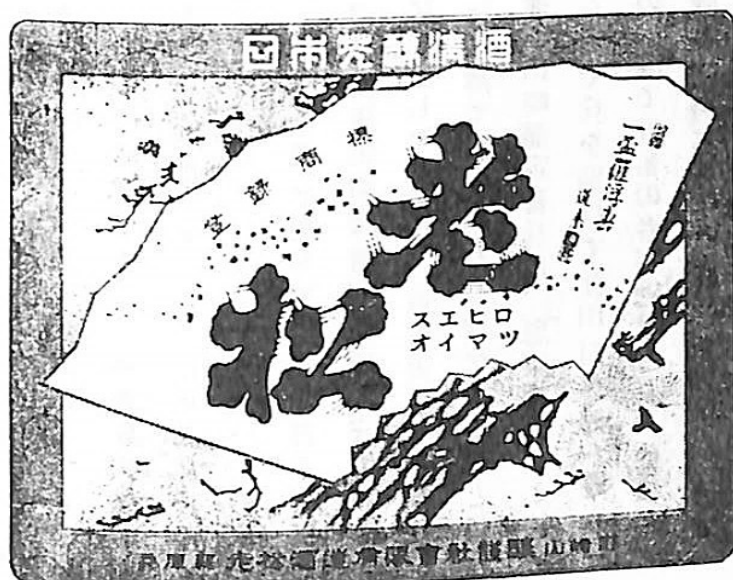
して会津に向かつて攻撃を始めたと言う。

幕兵の中にも六日の午後になり將軍より退脚の命が出たとか、噂は錯綜するが、一行はまだ正確な情報がつかめない。そんな時、京軍の撃つ砲弾が炸裂し旗本の一団の中にも多くの負傷兵が出た。督戦していた旗本の大將の姿も何時の間にか見えなくなっていた。硝煙の立ち込める中にちらちらはためく旗本の旗印が標的となつたらしく急にこの辺りに火柱が多く立ち始めた。

「あー集中砲撃されているー」と思った瞬間、共に居た庄丈太郎が土煙りと共にころがって倒れた。駆けよって見ると袴が裂けて大腿部に血が滲んでいる。炸裂する砲弾の破片を受けたい。早速、

晒布の帯をといて太股をしぼって止血したが、幕軍の一団は支離滅烈。こうなると面々も負傷者をかばって引退がるより仕方がなくなった。

毛利と堀口はかたみに肩を貸しながら後退を始めた。他藩の連中もかくなる上は大阪城に立籠って戦うのみ、と一同口々



に言い聞かせながら退いて行く。六日の夕刻から小雨が降り始めた。

帰りの足は行きの何倍か遅かった。雨が激しくなると民家に避けて小休止したり、暗夜に路をまちがえたりして、ようやく七日の昼前京橋御門にたどり着くと、門は閉され番士の言うには「公方様は昨夜城を出られ安治川口より舟に上船され江戸に帰へられた」と言い、「よって大阪城は將軍の命により戦火を避ける為、参戦の兵士は一兵たりとも城に入れぬ様にとの命令でござる。気の毒ながら大手前より上本町を経て天王寺より住吉街道へと指定された道を引き上げられよ」と言う。しかし「吾等は京橋御門内定番屋敷に住む本多家の臣、藩邸以外に帰る処はござらぬ。小門を明けてお通し下され」と願ったが「貴藩の面々は昨日皆引上げて帰邸してござる。一担命により閉門したからには一兵たりとも通す事はまかりならぬ。気の毒ながら思い思いに落延び候え」と、突っけんどんの返答であった。

とまどう折柄、遅れて帰着する会津・桑名・郡山・岸和田藩等の戦士達も門前で同じ返答に舌打して、持った鉄砲や旗印を堀の中に投げ捨て、「ちえ！義理も人情もあつた者か、情け知らずの腰抜けめー、今に天下はひっくり返るぞー！」と口々に怒声と悪態をわめき散らしながら銘々仕方なく落ちて行く。三名の者も仕方なく大手へと廻ったが大手も上本町も町の辻々に大阪町奉行所の同心達が警戒し「気の毒ながら大阪の市民と町を戦火より守る為、南行以外に通す事まかりならぬ」と同じ返答。思案にくれたが、年長の毛利伴吾が「そうだ、いっその事、天王寺の一心寺へ行こう、

一心寺は藩祖忠朝公の討死にされた御墓所の菩提寺である。大阪詰めの藩士は御命日には必ず代参する。今日はちょうど七日の御命日だ、寺の住持も知っている。藩祖のお導きだ」と一途の望みを頼りに重い足を引きずって寺にたどり着いた。

しかし寺でも類の及ぶ事を恐れて体良く断られ、それでも納所坊主は気の毒がって門前の山門茶屋を示し、「京橋様なればお馴染みのはず、何なら拙僧が口をききましようか」と言った。「そうだ！あの女将なら良く知っている」と毛利が言った。訪ねてみると調度その女将が居て顔を見るなり、「やあ：毛利はん、久しぶりですなあ：どないひとりなはったんや：：又その格好は、戦さに出とりなはったんだっか。まあそれは御苦労はんなこって」と毛利は照れくさそうに「暫く国元の勤めに帰っていたが、此度、殿の命令で公方様御警護の加勢に上阪したが、この体たらく、面目次第もござらぬ。迷惑ながら暫くかくまってはくれまいか」なんのなんのほかならぬ京橋様の御家来衆、鼻眉にしてもらったお礼どす。遠慮はいりません。ただしその格好ではね：：早ようぬぎ捨てなはれ、板場の着物もおますよって：頭も一寸ねえ：」と言われて見ると三人共鬚は大たぶさに鉢巻き姿、「早よう町人鬚に結びなおしなはれ、港には西国兵がいっぱい上陸してる噂どっせ」と丹波亀岡生れのこの女将は狭気肌の女で親切にかくまってくれた。一心寺の坊さんも安心して引上げた。

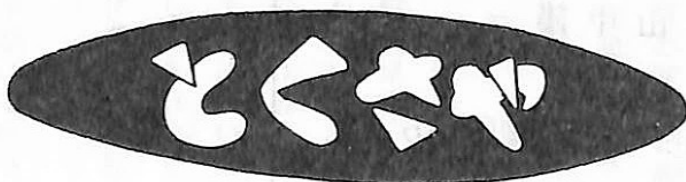
この様な有様で一行がやっと落ち着いたその夜ふけ、物凄い轟音が連続して起き、地響きと共に驚いて飛び起きた。見ればお城と

覚しき北の空に火柱が立っている。あとでわかった事であるが大坂城の火薬庫が放火で爆発したとの噂であった。一同藩邸の事が心配でならなかった。其の後、大坂城は官軍の手に渡り警戒は一層厳しくなった。三人の者は、なんとか藩邸に連絡をとろうと人を使って試みたが、官軍の警戒は厳しく手紙も改められる始末で、いつしか半月以上の日を過ごしてしまった。やっと一心寺のお参り僧の伝言で連絡が付き、藩邸より親戚の児嶋政之丞が訪ねて来てくれた。「おぬし達、足はあるのか？まさか亡霊では：：：」と「あの混乱の最中、別動隊は、てっきり討死にと思っていた。随分探索したのであるが行方知れず、北町奉行

所で戦死者の屍ね改め迄、頼んだがやはり知れず、国元へ飛脚を出したが帰っておらず、まさか山門茶屋に居ようとは気が付かなかった」と肩を抱き合って喜んでくれた。

「しかし、おぬし達、今すぐには帰れぬぞ。藩邸内は官軍の員数改めが厳しくて、今暫く此処に潜伏せよ。金は女将に預けて置く。国元でも京屋敷か

創業嘉永元年 きものと共に130余年
高級呉服の専門店



山崎町本町(さつき通)
☎(0790)62-1680代

らの急報によって時勢の波に乗りおくれまいと、殿自ら藩兵三百を率きつれ、十六日国表を発たれ二十日に京へ御着陣なされた由。大阪へも知らせがあった。飛札によれば、吾藩の者が幕軍に加わりし事は一切口にするな、例え内証がばれていても、吾藩の建前はあくまで官軍のお味方と、しらを切れとの御殿命、万一の時は大阪定番家老の勝手にした事故、国元のあづかり知らぬ事と、岩崎殿も覚悟してござる。吾等も元より謹慎の身でござれば、おぬし等は一時、脱藩の者として此処で暫くのんびりしてござれ、……そのうちきつと謹慎も解かれ帰参も可能であろう。時機を待て」と言うことであった。

「以上、戌辰の話は十八才で長州征伐に従軍し、二十二才で又伏見鳥羽の戦いに参加した堀口経良が晩年に語った維新の物語である。」

以下「次号に続く」

外科・内科

山 中 医 院

院長 山中陽一

山崎町西町・TEL⑥20036

津和野・萩の旅行記

志 水 美 好

平成三年の一泊旅行は津和野・萩と決めたものの、参加者が予想外に少なく、経費が大赤字になるので係として誠につらかった。その上、大型台風が九州西部を北上中ということで本当に気の重い旅行になってしまった。

九月二十六日、私達六十六名はバス二台を連ねて、重苦しい曇天の中を出発した。落合あたりからは薄日がさしはじめ愁眉を開くことが出来た。吉和ICをおりてドライブインへ着く。私達と同じコースを行くのだろうか。観光バスが何台も駐車場にいて一緒に昼食をすませる。

一時半頃空は晴れて来て、絶好の旅行日和になっていた。峠から津和野のこじんまりとした町並みが見えて来た。山陰の小京都といわれる津和野町は人口八千余りだが、亀井藩四万三千石の城下町として栄え、名所旧跡が多いことで有名である。蒸気機関車が走るのので有名になっている山口線の津和野駅前を通過して殿町に着いた。

商店街の駐車場に車を止め、店員のガイドに案内してもらって殿町を歩く。カトリック教会、藩校養老館、家老多胡氏邸表門等を眺めながら大橋まで行った。殿町の側溝には鯉が放流されてい

て、色とりどりの大鯉がのどかに泳ぐ姿は津和野ならではの風情である。橋から見下ろす大川にも色鮮やかな大鯉が群れていて、私達の目を楽しませてくれた。町役場の庁舎も門も古びた木造で古い町並みにふさわしいと感じ入った。養老館内の民俗資料館や川端の郷土館（歴史博物館）は見過して引き返し、店で喫茶や買物に暫し時間を費やした。

森鷗外の旧居は少し遠いのでバスに乗って移動してもらった。明治の文豪であり軍医総監であった森鷗外の旧居は、木造平屋建の質素な建物で先年昔の通り修復され美しく整備されている。続いて川向うにある我が国哲学界の先駆者として名高い西周の旧居も見学。村はずれにひっそりと建つ藁葺の陋屋であった。皆が買物を楽しんでいられる間に、馬場先櫓と嘉楽園まで大急ぎで廻って見ることにした。福井さんと二人だけだったので少々心寂しい気がした。

山の上にある津和野城跡、稲成神社、永明寺、坂崎出羽守の墓、マリア聖堂も見ると価値のある所だが、駆け足旅行ではとても叶わぬことなので案内記を読んでもらうことにして津和野を後にした。島根県と山口県の県境を越え、山中の余り広くもない道を辿って、午後五時頃東萩駅前のロイヤルホテルに着いた。萩は温泉宿でないのだからちょっと物足りないが、新しくきれいなホテルでゆったりしていた。全員八階の各々の部屋に落着いて旅の一夜を過ごすことになった。

二十七日朝目覚めた時はまだ雨は降っていなかったが、八時に

ホテルを出発する頃には雨が降り出していった。先づ東光寺へ出かけた。連絡不十分だったのか総門が閉まっていたので、雨の中を暫く門外で待たされた。毛利侯が開いた黄檗宗の寺で、大きな三門をくぐると宇治の万福寺と同じような大きな大雄宝殿が森の中に建っている。その横を通り抜けると後の茂みの奥に、毛利家奇数代の五藩主夫妻と一族の人達の墓が並んでいた。墓前の参道には数百基の石燈籠がびっしり並んでいて見事であった。

次いで、吉田松陰を祭る松陰神社と松下村塾を訪れる。こゝからは観光協会の若いガイドさんが案内してくれることになっている。折よく雨もやんでいて、ガイド嬢のくわしい説明を聞きながら、明治維新の原動力となった若い志士を育てた松下村塾を見て廻った。松陰が幽囚生活を送った小さな部屋と師弟で増築したという部屋、どちらも天井が低く粗末きわまりない。ここに学んだ志士の生き残った者が明治の元勳になったことを思うと感無量である。隣にある松陰

旅行・観劇・航空券

すぐお応えいたします

百神姫観光

〒671-25 兵庫県宍粟郡山崎町鹿沢68
(神姫バス山崎待合所内)

TEL (0790) 62-7588
FAX (0790) 62-7589

の生家杉家旧宅はかなり立派で部屋数も多かった。何分にも大勢の観光客が詰めかけているので、号車別にまとめられず、別れ別れになって神社に詣りバスへ引き返した。

神社のすぐ近くに伊藤博文の旧宅があるのだが、時間がないので見学を割愛して、萩城下町へと車を急がせた。藩校明倫館の説明を聞きつつ市役所前を通って程なく城下町の駐車場に着いた。松陰神社と一変して団体客は我々だけでひっそりしている。高杉晋作や木戸孝允（桂小五郎）が学んだという円政寺と金比羅社に先づ案内された。小じんまりとした一角で県下一番といわれる美しい大きな石燈籠や十二支の木彫のある社が印象的だった。昔さながらの町並みの江戸屋横丁を傘をさして静かに歩んで行く。青木周弼の旧居を通り過ぎ木戸孝允の旧居には入る。裏庭まで廻って珍しい隠し二階の窓の説明を聞く。藩医の家柄が偲ばれる割に整った建物であった。

木下邸を後にして次に菊屋家住宅を見学した。全国でも最古に属する町家として貴重な存在で国の重要文化財に指定されている。さすが毛利藩の御用商人の邸宅だけあって立派な座敷がいくつも連なり、大石をあしらった庭園も流石であった。土蔵もいくつもあり、部屋や土蔵には色々な調度品や民具、書画等の貴重な文化財が陳列されていて見あきしない。ゆっくり鑑賞している暇もなく一通り見て廻るだけやっとなかった。菊屋横丁は菊屋の建物群のナマコ塀が百米余も続いてその美しさはいはん方なくもう一度ゆっくり訪ねたい思いだった。

田中義一誕生地の碑の前を過ぎると、次は高杉晋作の旧宅である。雨の中で写真だけ写して急いで皆の後を追って駐車場へ帰った。天気の良い日にゆっくり時間をかけて自転車で城下町を廻るのが理想的な萩の旅だが、団体旅行ではこの城下町界隈を歩くだけでも特別なコースのようである。歩くのはここだけにして萩城跡へと向った。

旧厚狭毛利家萩屋敷長屋の北側の広場にバスを止めて、萩城大手まで歩いて行った。毛利藩三十六万石の居城である。本丸跡は指月公園になっていて春は桜の名所だという。城らしい建物は何も残ってなくて、天守台の大きな石垣や大手の枡形の石垣だけが往時を偲ばせているばかりだ。どうにか雨もやんでいて傘をささずに大手橋で記念写真を撮ることが出来た。萩焼や土産物を物色して萩見物を終えることになった。台風近づいての降雨の中の萩めぐりだったが、風がなくておとなしい雨だったのが幸いだっ

た。
萩城跡を後にして、昼食のため萩の北部海岸にある「楽天池」へ向った。雨にけぶる北長門海岸国定公園の美しい風景が眺められて楽しいドライブになった。ここは設備も立派だったし昼食もよくてくつろいだ気分になった。安政五年築造の萩反射炉があると聞いたので見たいと考えていたところ、楽天池への往復中にバスの窓から望見できて嬉しかった。

十二時五十分、萩ですべての予定をすませて一路帰路について。二時頃山口ICから中国自動車には入りやれやれと一安心し

た。雨も大した降りようでもなく、新見の辺では雨もやんでいた。院庄を通る頃強い風が吹きはじめていた。

予定より早く午後七時に山崎へ無事帰着できた。後で聞けば八時頃から中国道は台風のため閉鎖されたとのこと。危ふくセーフといったところだった。台風十九号のために終始ハラハラし通しの旅行だったので、一層忘れがたい思い出となった。皆様に終始協力して頂いたお蔭で無事秋の旅行が終えられたことを感謝しています。

表装全般

…古いものを
大切に…

表具師 **松本永春堂**

山崎町鹿沢本通り
TEL. 62-0122

宍粟郡の指定文化財目録

○国指定文化財

種別	名	称	指定年月日	所在地
建	古井家住宅	(通称千年屋)	昭42・6・15	安富町皆河
建	御形神社本殿	附棟札四枚	昭42・6・15	一宮町森添
繪	絹本着色	迦伐蹉尊者像	大6・4・5	安富町(光久寺)
繪	〃	注茶半托迦尊者像	大6・4・5	安富町(光久寺)
彫	木造不動明王立像		大5・5・24	安富町(光久寺)

○県指定文化財

種別	名	称	指定年月日	所在地
建	石造五重塔		昭41・3・22	安富町(今念寺)
彫	木造大日如来坐像		昭49・3・22	一宮町(正福寺)
考	四区画袈裟襷文銅鐸	(青木銅鐸)	昭52・3・29	山崎町歴史郷土館
有民	河原田農村芝居堂		昭44・3・25	一宮町河原田
有民	農村歌舞伎舞台		昭45・3・20	千種町河呂

種別	名 称	指定年月日	所 在 地
史	青木銅鐸出土地	昭52・3・29	山崎町青木
史	金谷山部古墳	昭53・3・17	山崎町金谷
史	一つ山古墳	昭46・4・1	一宮町須行名
史	高保木たたら（製鉄）遺跡三カ所	昭45・3・30	千種町西河内
名	鹿ヶ壺	昭44・3・25	安富町関
天	大歳神社のフジ	昭47・3・24	山崎町上寺
天	大倭物代主神社のスギ（夫婦杉）	昭47・3・24	山崎町下牧谷
天	山崎八幡神社のモッコク	昭52・3・29	山崎町門前
天	岩上神社の夫婦スギ	昭61・3・25	山崎町上ノ
天	水尾神社の大スギ	昭52・3・29	安富町関
天	植木野天神のムクノキ	昭49・3・22	安富町植木野
天	庭田神社のケヤキの大木	昭60・3・26	一宮町能倉
天	安積のカヤの古木	昭60・3・26	一宮町安積
天	池王神社のアカガシ林	昭61・3・25	一宮町深河谷
天	火魂神社の大ムクノキ	昭63・3・22	波賀町日見谷
天	中宮神社の大スギ	昭40・3・16	千種町河内

○町指定文化財

種別	名称	指定年月日	所在地
建	山崎藩陣屋門（紙屋門）と左右の土塀	昭60・2・14	山崎町鹿沢
古	山崎八幡神社文書「新町申付書」	昭60・2・14	山崎町歴史郷土館
古	山崎八幡神社文書「市日の定書」	昭60・2・14	山崎町歴史郷土館
古	山崎藩覚帳 八二冊	昭60・3・9	山崎町鹿沢
無民	宇原岩田神社奉納獅子舞	昭62・10・8	山崎町宇原
天	比地の滝	昭60・2・14	山崎町上比地
天	与位の洞門	昭60・2・14	山崎町与位
天	矢原神社の大スギ	昭60・2・14	山崎町矢原
天	与位神社の大スギ	昭60・2・14	山崎町与位
天	桓武伊和神社の社叢	昭60・2・14	山崎町中野
天	大沢五神社の大シラカシ	昭60・2・14	山崎町大沢
天	高下東諏訪神社の大スギ	昭60・2・14	山崎町高下
天	塩田明証寺のイワヒバ群生地	昭60・2・14	山崎町塩田
建	水尾神社本殿付棟札二枚	平2・3・31	安富町関
絵	木庵禪師頂相	平3・3・30	安富町名坂開善寺

種別	名称	指定年月日	所在地
彫	木造葉師如来座像	平2・3・31	安富町安志法性寺
彫	木造釈迦如来座像	平3・3・30	安富町安志法性寺
無民	関の万灯	平3・3・30	安富町関
史	塩野岡ノ上群集墳二基	平2・3・31	安富町塩野
史	稲垣子華墓	平3・3・30	安富町名坂
史	三森城址	平3・3・30	安富町三森
名	鹿ヶ壺欧穴	平2・3・31	安富町関
天	ヒメハルゼミ生息地	平2・3・31	安富町関
天	矢倉神社のツクバネガシ林	平2・3・31	安富町皆河
天	栃原天神のシイ林	平2・3・31	安富町栃原
天	狭戸大歳神社のカヤ林	平2・3・31	安富町狭戸
天	関の大カツラ 二株	平2・3・31	安富町関
天	善照寺のショウフクジザクラ	平2・3・31	安富町皆河
天	塩野大歳神社社叢	平3・3・30	安富町塩野
建	石造宝篋印塔	昭57・11・15	一宮町三方町
建	石造宝篋印塔	昭57・11・15	一宮町河原田

種別	名	称	指定年月日	所在地
建	石造宝篋印塔		昭57・11・15	一宮町上岸田
建	石造五輪塔	二基	昭57・11・15	一宮町黒原
彫	木造虚空蔵菩薩坐像		昭59・12・3	一宮町下野田
彫	木造聖観音立像		昭59・12・3	一宮町東河内中坪
彫	木造薬師如来立像		昭59・12・3	一宮町東河内本谷
彫	木造聖観音立像		昭59・12・3	一宮町上岸田仏心寺
彫	木造薬師如来坐像		昭59・12・3	一宮町百千家満
工	伊和神社袖賑用東市場屋台幕		昭62・5・1	一宮町東市場
有民	鶴 図		昭62・3・30	一宮町伊和神社
有民	熊谷直実と平敦盛図		昭62・3・30	一宮町伊和神社
有民	百人一首図	一七面	昭62・3・30	一宮町御形神社
	付由緒添額一面			
有民	左義長羽子板		昭62・3・30	一宮町御形神社
有民	巴御前勇戦図		昭62・3・30	一宮町御形神社
史	伊和中山古墳群（一号、二二号）		昭56・11・3	一宮町伊和
天	赤ガシ		昭56・11・3	一宮町深河谷

種別	名	称	指定年月日	所在地
天	ふゆづた	二本	昭56・11・3	一宮町生栖
天	日野神社社叢		昭56・11・3	一宮町上岸田
天	大スギ	二本	昭56・11・3	一宮町中安積
建	齊木名久城宝篋印塔		昭61・8・28	波賀町齊木
建	齊木中村宝篋印塔		昭61・8・28	波賀町齊木
建	飯見宝篋印塔		昭61・8・28	波賀町飯見
建	原宝篋印塔		昭61・8・28	波賀町原
彫	満願寺木造大日如来坐像		昭61・8・28	波賀町安賀
彫	安養寺木造阿弥陀如来及び両脇侍像		昭61・8・28	波賀町齊木
彫	長源寺木造如意輪観音坐像		昭61・8・28	波賀町引原
無民	チャンチャコ踊り		昭61・8・28	波賀町安賀
無民	チャンチャコ踊り		昭61・8・28	波賀町原
無民	水谷明神社の獅子舞		昭61・8・28	波賀町上野
史	波賀城跡		昭61・8・28	波賀町上野
天	日見谷火魂神社の大ムクノキ		昭61・8・28	波賀町日見谷
天	原八幡神社の夫婦スギ		昭61・8・28	波賀町原

種別	名	称	指定年月日	所在地
天	小野諏訪神社の大スギ		昭61・8・28	波賀町小野
天	小野の大トチノキ		昭61・8・28	波賀町小野
天	上野宝殿神社社叢		昭61・8・28	波賀町上野
建	西蓮寺本堂		昭57・3・5	千種町千草
建	西方寺本堂		昭57・3・5	千種町室
建	河呂大森神社社殿		昭57・3・5	千種町河呂
建	岩野神社社殿		昭57・3・5	千種町岩野辺
建	宝篋印		昭57・3・5	千種町黒土
工	福海寺の鐘		昭57・3・5	千種町岩野辺
有民	農村歌舞伎舞台		昭57・3・5	千種町岩野辺
有民	農村歌舞伎舞台		昭57・3・5	千種町下河野
無民	チャンチャコ踊り		昭57・3・5	千種町鷹巣
無民	千草念仏行事		昭57・3・5	千種町千草
無民	ぼんおどり		昭57・3・5	千種町千草
無民	雨ごい踊り		昭57・3・5	千種町西河内
史	宇野氏墓所	八基	昭57・3・5	千種町千草

種別	名	史	史	史	史	史	史	史	史	史	史	史	史	史	史	史
	大寺遺跡	かなな流し場	板馬見修験行場	天児屋鉄山跡	荒尾鉄山跡	高羅鉄山跡	三室鉄山跡	森の上鉄山跡	大庄屋跡石垣	紙屋屋敷跡石垣	弥生式住居跡	越札かなな仕上場	奥天児屋鉄山墓地	江浪かなな仕上場	小河内滝	カナベの滝
種別	名	史	史	史	史	史	史	史	史	史	史	史	史	史	史	史
指定年月日	昭57・3・5	昭57・3・5	昭57・3・5	昭57・3・5	昭57・3・5	昭57・3・5	昭57・3・5	昭57・3・5	昭57・3・5	昭57・3・5	昭57・3・5	昭57・3・5	昭59・6・25	昭59・6・25	昭57・3・5	昭57・3・5
所在地	千種町千草	千種町岩野辺	千種町河呂	千種町西河内	千種町岩野辺	千種町河内	千種町河内	千種町西河内	千種町岩野辺	千種町西山	千種町千草	千種町岩野辺	千種町西河内	千種町西河内	千種町岩野辺	千種町河内

種別	名称	指定年月日	所在地
名	黒土の滝	昭57・3・5	千種町黒土
天	中宮神社の大杉	昭57・3・5	千種町岩野辺
天	中宮神社のめおとイチョウ	昭57・3・5	千種町岩野辺
天	地藏堂の大アスナロ	昭57・3・5	千種町岩野辺
天	内海の大杉	昭57・3・5	千種町岩野辺
天	大森神社の大木オノキ	昭57・3・5	千種町河呂
天	鍋ヶ森神社のクマノ杉	昭57・3・5	千種町西河内
天	教福寺のお葉付イチョウ	昭57・3・5	千種町西山
天	室の大ヒイラギ	昭57・3・5	千種町室
天	ヤマドリゼンマイ群生地	昭57・3・5	千種町鷹巣
天	八幡神社の大杉	昭57・3・5	千種町鷹巣
天	八幡神社の大フジ	昭57・3・5	千種町鷹巣
天	湿地植物群生地	昭57・3・5	千種町鷹巣
天	ハツチョウトンボ生息地	昭57・3・5	千種町鷹巣
天	大森神社の照葉樹林	昭57・3・5	千種町千草
天	中宮神社の大ケヤキ	昭57・3・5	千種町河内

種別	名	称	指定年月日	所在地
天	シャクナゲ自生地		昭57・3・5	千種町河内
天	ブナ原生林		昭57・3・5	千種町三室山
天	一の谷のお鍋		昭57・3・5	千種町西河内
天	宍粟くますぎ		昭57・3・5	千種町西河内
天	西山のサカ木		昭57・3・5	千種町西山
天	泉光寺のマキ		昭57・3・5	千種町西山
天	八重垣神社叢林		昭59・6・25	千種町下河野

建造物Ⅱ建 絵画Ⅱ絵 彫刻Ⅱ彫 工芸品Ⅱ工 考古資料Ⅱ考
 有形民俗文化財Ⅱ有民 無形民俗文化財Ⅱ無民 史跡Ⅱ史 名勝Ⅱ名
 天然記念物Ⅱ天

千種町
 大
 表
 示

備前焼大甕を展示

町 歴 史 郷 土 館

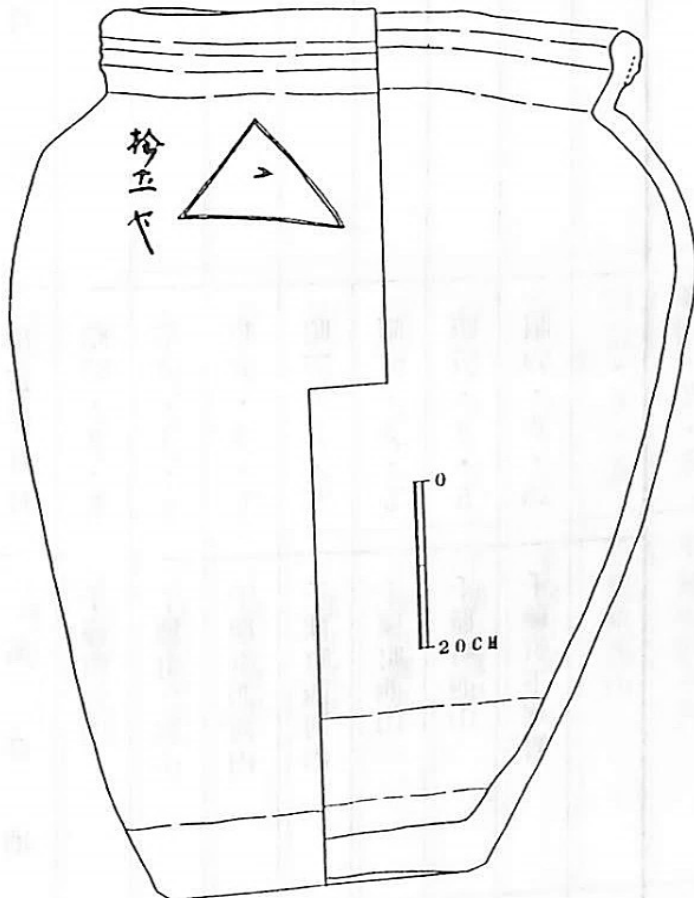
山崎町では「ふるさと創生」の一環として、最上山から通称一本松と云われる山頂一帯を「ふれあいの森」にすべく、自然を生かした公園づくりに取り組んでいる。この頂上付近には篠ノ丸城跡があり、今も空壕や西方に続く平坦地が残っている。また、中央部には妙勝寺の妙見堂、前堂、庫裡があった。このお堂は昭和十二年五月に完成したもので、妙見菩薩が祀っており、信仰の場ともなっていた。このほどお堂が取り壊されることになり、庫裡の縁側の端の雨水受けとして使われていた大甕を保存すべく、妙勝寺のご理解を得て町の歴史郷土館に保管することになった。

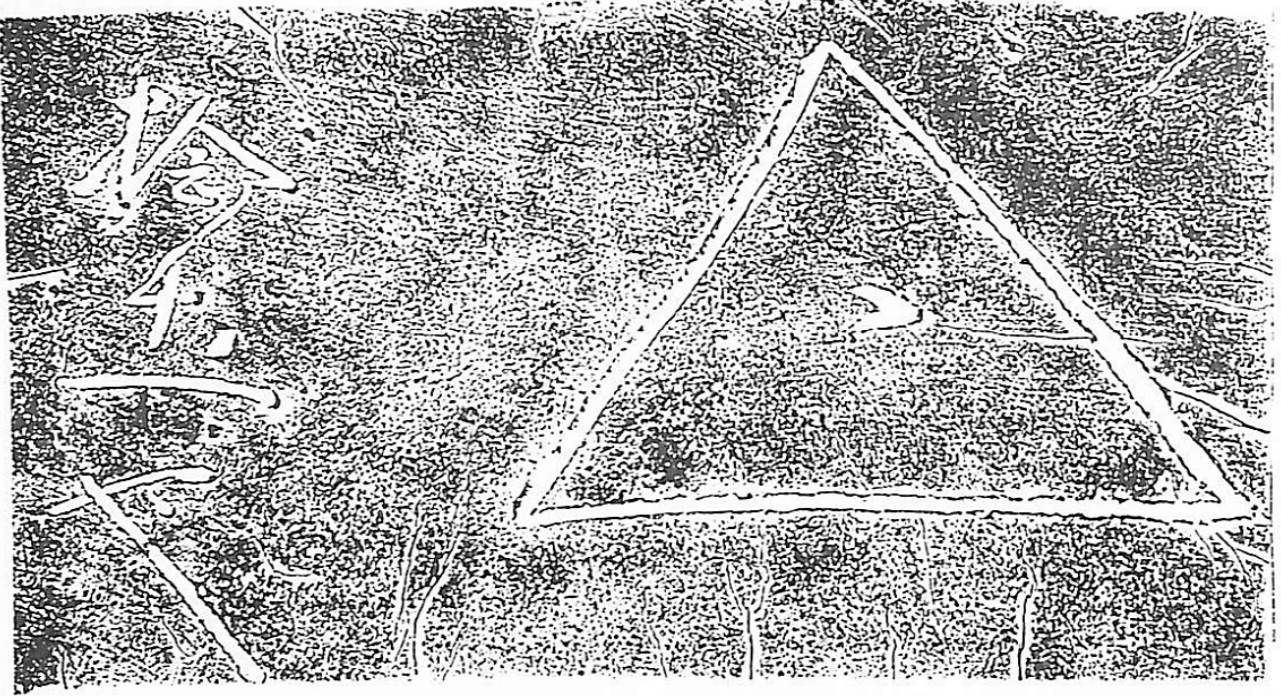
この甕は、いつの頃に運び上げられたのかは不明であるが、北門前屋にあったものではないかと考えられている。肩部まで地中に埋められていて頭部から口縁部の一部が壊れており、セメントで補修した跡はあるが、ほぼ完形品として掘り出された。

ややいびつではあるが甕の大きさは高さ一〇六・〇cm、口径六〇・五cm、最大胴径八一・〇cm、底径三九・〇cmである。色は全体が茶褐色で、一部肩部に緑褐色の自然釉の吹き出しが見られる。玉縁外面には三条の凹線をめぐらし、口径内面にも広い凹線をめぐらしている。頸部から胴部にかけては、ハケによる撫での痕跡を残している。また、

肩部には、ヘラを使った瓶銘が入っており、拓図に示す「△」は陶工を示すものである。その横に「捻土（ひねりつち）也」の銘文も入っている。『日本古陶銘款集』（陶器全集刊行会編）によると、備前焼の山麓窯末期から大窯初期の瓶銘として記載されており、十六世紀後半から十七世紀前半にかけて製作されたものと考えられる。

平成三年十二月二十五日、氷雨降る一日を費やして、都市整備課の小川、永峰、社会教育課の大谷、谷林、亀井、坂根の六名が掘りあげ、広坂造園の運搬車で搬送がなされた。





事務局だより

- 一、例年の通り、平成四年度の総会を三月二十二日（日）に開催して、三年度の事業報告・会計報告を行ない承認を受けました。そして四年度の事業・予算案について審議して頂きました。
- 二、総会当日、会報に毎回「近世初頭の山崎藩」を執筆して頂いている、島田先生に来てもらって、「宍粟郡守令交代記」と片岡醇徳について、お話をさせて頂きました。
- 三、講演のあと、「宍粟郡守令交代記」の復刊について、島田先生を囲んで話し合いをもちました。今秋は無理かと思いますが、会員の皆様に配付できるように進めています。
- 四、春の研修旅行案内を会報に挿入しています。参加ご希望の方は早目にお申し込み下さい。
- 五、社報No.79配布と同時に本年度会費一、〇〇〇円を地区幹事さんで集金して頂くようお願いいたします。

（山崎郷土研究会事務局）

山崎町

柳田

弘宅